

「大和」との沖繩特攻後の佐世保帰投時以降が戦務丁である。

## 対空・対潜・船舶警戒隊

福岡県 小関 正勝

私は北海道の釧路で生まれましたが、七歳の時父が死亡したので、復員して帰ったのは母の妹の家でした。本籍は大分県日田郡、現在の天が瀬でありました。

大正十二年一月六日生まれで、昭和十八年徴集兵、翌十九年二月一日、海軍へ徴兵で、佐世保第一海兵団へ現役兵として入団しました。二月十一日、印鑑を持って旅費を取りに来いと言われました。

入団十日目のこと、突然「衣囊を片付けろ」と言われ、初年兵二十人くらいが、衣囊に衣服等をつめ、担いで博多の築港に待っていた病院船に乗せられることになりました。博多には、我々を引率する転勤下士官がおられ、下士官に付いて旅館に泊めてもらいました。

各自、旅費として三百円（当時としては大金）支給されていたので、運賃、宿泊料は各人払いということになりました。

博多を朝出帆し船は朝鮮の釜山へ着岸しました。次に列車に乗り換え北上、「羅津特根」といわれました。羅津特別根拠地隊に入隊したのであります。

羅津では十日間くらい、軍人としての初歩の訓練、行進間の敬礼などを教わりました。二月の北鮮は九州で生活していた我々にとっては酷しい寒さが身にしました。文字通り凍みついていました。当時の写真を見ても持っていますが、銃剣術や各班毎に行進や紅白に分かれての演習などでした。この特別根拠地隊は教育隊のようなものであります。

ある日、大きな船が羅津港に入ってきて、我々の仲間二百人くらいが乗り込むと、直ちに出港し着いた所が、なんと日本の内地、新潟港で、今度は陸路、鉄道で横須賀の海兵団へ入って、船舶警戒隊に入隊となりました。三月十日のことでした。

四月十五日、命令により海兵団を退団し、自分が三

十二人を引率し横浜に着くと、志願兵で沖繩県出身の金城兵長が待っていて、我々はその指揮下に入り、朝鮮郵船の「泰国丸」（九〇〇〇トンくらい）に乗りました。船のデッキには上陸用舟艇が足の踏み場もないくらい、ロープを掛け荷積みしてありました。また、十三ミリ機関砲二門が積んであり、金城兵長が射手で、私が距離を測定する、他の一、二、三番は弾薬手を命ぜられました。

船上では、暑くとも裸ではいけないと、常時海軍の白い服を着て寝ていなければいけないのです。五月一日、二、三隻の船団を組んで、佐世保鎮の駆逐艦「水無月」一隻と、駆潜艇約十隻が護衛してサイパンへ無事着くことができました。艦船の兵は、島には物資が少ないということで上陸はさせられませんでした。

五月十日、サイパンを出港。パラオを目指して航行した晩、我が乗船の「泰国丸」は米潜水艦より魚雷攻撃を受け、一発は船首に、二発目は船尾に命中したので、沈没するまで、七分くらいしか何をするともできません。特にその晩は真つ暗闇でしたが、

私は船が沈む反対側の舷だったので、沈没する少し前に水に飛び込んで助かりましたが、船の沈む方へ飛び込んだ者は、船と共に海中に巻き込まれてしまい、私の同年兵も随分死にました。

私等は、最初、駆潜艇に助けられましたが、艇が小さいので、海上で「水無月」に移乗しました。パラオに行く陸軍の輸送船は随分やられてしまい、船団は、バラバラに崩れてしまったので、「水無月」は我々を救助したまま、元のサイパンに戻りました。

そのため、我々はサイパンに仮入隊したのですが、その時、サイパンの兵舎はガラ空きでした。兵舎の周辺には、今まで見たことのない南国の果実が残されていました。私が仮入隊したサイパン警備隊に、もし長くいたら、我々も昭和十九年七月に玉碎していたわけです。

サイパンでは、疎開した家を壊す作業をしていたのですが、内地へ帰る船が来ました。最後の引揚船ということで邦人も沢山乗っていましたが、我々海軍の仲間の同年兵の多くが戦死してしまったので、乗船し

たのは下士官と金城兵長等と我々機関砲隊の兵員は何人もいませんでした。お陰で運よく（敵はマリアナ諸島攻略に重点をおいていたためか）横浜港へ着くことができました。

奇跡的な内地帰還で、思えば本当に幸運であったわけでありませぬ。

内地へ着いた我々は、横浜市中区北中通りの生糸検査所の所の船舶警戒隊へ転属になりました。この警戒隊は以前は海兵団の中にあつたのですが、戦後どうなっているのか、行ってみたいと思えますが、今日まで行ったことはありません。我々は当時二階にいましたが「船舶警戒隊」の看板があげられていました。

六月になり、何人かが呼ばれ、私と熊本の兵隊と上等下士と三人で大きな船に便乗し、門司港に寄港しました。母のいる行橋町は近いので帰りたい気持は一杯でしたが、帰って母の顔を見ることは許されませぬ。

乗船勤務する船は、大連の山県通りにある大連汽船株式会社「長平丸」でした。船舶警戒隊の任務は対潜、対空が主な任務であり、船は物資・貨物の輸送船

であります。

航路は朝鮮の元山、仁川や北支の秦皇島方面がありました。我々は甲板で空、潜の見張りを交替でしており、最低二時間の警戒勤務です。交替時申し送りをするのですが、次の勤務者に今どういう状態かを確実に把握させることが、本船の生死にかかわる大きな責務であるわけです。

その後、台湾・香港へも行きましたが、その頃台湾に大空襲があり、焼けた砂糖がアスファルトを敷いたようにベッタリとしていました。砂糖が溶けて、焼けた甘い香りがしていました。その頃、後に聞けば米機動部隊が台湾全土を空襲したり、台湾沖の航空戦が続けられていたということです。

昭和十九年五月、私は水兵長に進級しまして、船舶警戒隊の一員として勤務をつづけておりました。我々の乗る船は貨物船から貨客船になり、一般に警戒兵は八人くらい乗り込み勤務をしておりました。台湾沖航空戦や、比島沖戦など状況はだんだんと険悪となり、本土は勿論、支那大陸沿岸、台湾海峡、東支那海の空

襲、潜水艦の跳梁、艦砲射撃さえも盛んになって来ました。

その時、我々は空襲や雷撃は免れておりましたが、六月になると、サイパン・テニアン島の砲撃や、海兵隊の上陸、サイパン守備隊の苦戦、玉砕の情報を船の無線で聞いたりして、我々がもしいたら玉砕だったと思つての勤務でした。その後、パラオ諸島にも米軍が上陸したことも知りますます運の良さと、先に戦死、海没した戦友の上に思いをいたし、哀悼の意を強くしていました。

その後、「長平丸」で上海への帰りに、黄海で米軍機による執拗な銃・爆撃を受けました。人員の殺傷は無かったのですが船が損害を受けましたので、大連のドックに入り修理中に終戦の報を受けましたが、信ずることもできませんでした。しかし、事実と知り一挙に力が抜けてしまいました。

私とちょっと古い兵長とが船に残っていましたが、暑いのでマスト上で毛布を着て寝ていましたら「ソ連兵が来た、早く降りて来い」と同年兵が言いに来まし

た。

私は海兵団の衣囊一式と靴を支給されていた程度で、他の被服等はほとんどありませんでした。大連に瀕岸警備隊ができていて、トラックで食料や衣料等を夜通し積んで来ていました。そこには大きな陸軍病院があり、一部は未完成でしたが、我々は一応荷を降ろし、大分そこにいました。建築中だったので大工は逃げたばかりでしたから、鉋屑かんこがいっぱいありましたので兵隊を連れて風呂を沸かし、唐黍の実を取って粉にして焼いて食べました。その頃は俘虜であったので食物がなく、あの臭いと味は木だに忘れられません。

衣服は着たまま、食糧はソ連のふすまの黒パンを適当に切つて食べる。ソ連の食物は質が悪く藁屑が入つていて汚い。ソ連兵は掛算、割算はできぬので、極端に言えば足算、というより、一つ二つと数えていくのだから時間がかかる。間違えたとなると、また初めからやり直しました。場所は中国でも、海軍の我々はソ連の管轄下での抑留でありました。

「明日帰らせる」などと嘘をついて働かせる。帰国

後、シベリア抑留者に聞いたのと同じ方法で日本軍俘虏に強制労働をさせたのであります。我が部隊は、対空・対潜警戒だから兵器はほとんどありません。労働は大連だけではなかったのです。中国大陸も奥地へ行きました。そのうちに、アンペラを積んである貨車が来ました。実は、明日シベリアへ連れて行く予定だったと言うが、どういうわけか中止となり、我々はシベリア抑留をされず、お陰で命が助かりました。

昭和二十三年になり、海軍軍人だけで大連から出帆、長崎県の南風崎海兵団に帰ることができました。その時の仲間は三十人くらいでしたが、遠方の者から帰らせるので、私は九州福岡県だから最後になりました。上海から持って来た物を捨てるわけにもいかず、私は薬缶を持って帰りました。

母の妹の家が行橋にあったのでそこへ帰りましたが、私が帰ることは家の者は全然知りません。私が外地へ出てからその間、音信などできず、私がどこでどうしているか判らなかつたのです。母は私の顔を見るなり、涙をポロポロ流していました。私も一緒に泣きました。

着ていた衣服はシラミだらけの汚い衣服なので、煮てシラミ退治です。私は一人息子、母一人、子一人、他の親族は母系の従兄弟、姉妹だけ。家は農業でしたので、農業をやったり、昔やっていた左官をしました。両方共、昔馴れた仕事だったので、戦後仕事は相当ありました。体は海軍で鍛えてあるから、現在まで健康で丈夫です。

思えば、サイパン、バラオにも行かず、後は船舶警戒隊という輸送船の海上勤務。ほとんど無装備、対潜・対空の兵器も無い、戦力無き海軍なのに、よくぞ命永らえ、また、サイパン出発後、沈没の時にも幸いに、沈没側でない舷にいたため、沈船に巻き込まれず漂流し、駆潜艇から駆逐艦に移乗もでき、サイパンに残らず玉碎もせず、また海上危険な最後の民間船で横浜へ着きました。

なんと「綱渡りの軍隊生活」だったことでしょう。戦後も母一人子一人で生き抜きました。いつも、この幸運に感謝し、生かされた人生、余生を大切に生きていきます。